

# 和刻本『説文解字五音韻譜』の 依拠した版本について

高橋 由利子

## 一、はじめに

筆者は前に「官版『説文解字』の依拠した版本について」<sup>(1)</sup>を書き、その中で、江戸時代に日本で刊行された漢籍が、当時の中国のどの版本にもとづいたものであるかを『説文解字』について検証した。その結果次の二点が明らかになった。

1. 官版『説文解字』は中国の『説文解字』毛氏汲古閣が刊行した通行本にもとづき翻刻された。
2. その通行本が空白にして不明な部分は『説文解字五音韻譜』によって補われた。

ただ、前稿では2にあげた『説文解字五音韻譜』についての詳しい検討は行わなかった。本稿ではそれを改めて取り上げ、当時中国では『説文解字五音韻譜』にどのような版本があり、その中のどの版本が日本で和刻本を刊行する際に使われたかについて検証するものである。

## 二、『説文解字五音韻譜』と『説文解字』

宋の李燾（1114-1184）の撰した『説文解字五音韻譜』は中国においても日本においても、しばしば漢の許慎の撰した『説文解字』と混同されてきた。その原因は大きく分けて次の3点にある。

1. 『説文解字五音韻譜』の持つ書物としての性質に拠るもの。
2. 『説文解字五音韻譜』の版本の出版状況に由来するもの。
3. 『説文解字五音韻譜』の書物の形式に由来するもの。

『説文解字五音韻譜』についての考究を行なう際には、まずその問題について明確にし、混同されたイメージから真の『説文解字五音韻譜』を切り分ける必要がある。以下それらの混同の原因についての考察を行ない、『説文解字五音韻譜』を採求する準備作業とする。

### 1. 『説文解字五音韻譜』の持つ書物としての性質に拠るもの。

『説文解字』は親字である小篆、その意味の説明である説解を五百四十の部首の順に配列した辞書であった。それに対して、『説文解字五音韻譜』はその『説文解字』の親字と説解をそのままそっくり残した上で、部首と文字の配列だけを、当時の別の辞書の形式にならい、韻の順に組替えたものであった。

つまり、辞書として、字と意味を調べるという点においては、両者は同じであったため、『説文解字五音韻譜』を作った作者も、受け入れる側も、『説文解字』の検索の便のための改良版という認識を持っており、両者を識別する意識が希薄であった<sup>(2)</sup>。

### 2. 『説文解字五音韻譜』の版本の出版状況に由来するもの。

『説文解字』は漢代に作られた原本は伝わらず、宋代になって、当時皇帝の勅命により一つの校訂本が作られた。そして、その校訂本に対して、字の配列を変えて検索の便を図った書物が刊行された。『説文解字五音韻譜』がそれであった<sup>(3)</sup>。

ところが、時代が経るにつれ、こんどはその宋代に作られた『説文解字』の校訂本そのものが伝わらなくなったため、『説文解字五音韻譜』が宋代の『説文解字』の校訂本と混同されたり、漢代『説文解字』の原本と混同されるような状況が生まれた<sup>(4)</sup>。

また、一方、『説文解字五音韻譜』自体も、宋代の李燾の原書が伝わらなくなった。

そのため明代になって陳大科がそれを覆刻刊行したが、「刻『説文解字』序」という序文を付けた上、その各巻に「説文解字」という題字をつけたため、両者の混同に一層の拍車をかけることとなった。(p.13 図版1、2、3を参照)

### 3. 『説文解字五音韻譜』の書物の形式に由来するもの。

前述した漢代『説文解字』の原本は十五巻にその著者である許慎の序文があり、宋代の『説文解字』の校訂本にはその校訂者である徐鉉の序文があった。

北宋本校刊

說文解字

汲古閣藏板

刻說文解字序

明登善矣都察院右都御史兼兵部侍郎前兼學士科給事兼糾謬

嘗考漢鄼侯草律學僮十七已上  
試諷籀書九千字竝得除吏試明  
習八體得給事尚書御史吏民上  
書字或不正輒舉劾之夫漢雖承  
秦火之後嫚罵之餘乎而廣厲字

図版1 陳大科序 および 封面

說文解字卷一

上平聲一

東 一德紅 切東

豐 三敷戎 切豐

𠄎 五直弓 切𠄎

𠄎 七居戎 切𠄎

𠄎 切𠄎

工 二占紅 切工

𠄎 四方戎 切𠄎

𠄎 六羽弓 切𠄎

𠄎 八居戎 切𠄎

𠄎 十力鍾 切𠄎

許慎自序

許冲上書

漢安帝年

按舊本凡遇慎字皆不書止注曰御名殆重刻  
下宋孝宗年間避帝諱也今無所嫌仍本字

古者庖犧氏之王天下也仰則觀象  
於天俯則觀法於地視鳥獸之文與  
地之宜近取諸身遠取諸物於是始  
作易八卦以垂憲象及神農氏結繩  
爲治而統其事庶業其繁飾僞萌生

図版2 許慎自序

図版3 卷一題字

ところが、『説文解字五音韻譜』にも、最初の「許氏説文」の題字の後にその二つの『説文解字』の序が冠せられていた。その上、宋代の李燾の原書に付けられていたであろう李燾の序文が、後の『説文解字五音韻譜』の版本の中では失われてしまい、許慎と徐鉉の二つの序文だけが残った。そのため、序文だけを見ると、あたかもそれが『説文解字』という書物であるかのような印象をあたえるようになった<sup>(6)</sup>。

### 三、『説文解字五音韻譜』の著録について

中国の目録の中で最初に『説文解字五音韻譜』に関する叙述があるのは、元の馬端臨の『文献通考』である<sup>(6)</sup>。ただし、それは『説文解字五音韻譜』本体の説明としてではなく、別の『説文解字繫傳四十卷』という書物<sup>(7)</sup>についての説明の中に、『説文解字五音韻譜』の序文を引用しているのである。それは、その中に『説文解字繫傳四十卷』に言及しているためと考える事もできる<sup>(8)</sup>。

この序文の中で李燾はなぜ、またどのようにして自分が『五音譜』を作ったかについて、『説文解字』やその他の、字書、韻書の刊行の歴史を記しながら述べている。この『文献通考』の中に残された李燾の序文によってわれわれは今は失われてしまった宋代の『説文解字五音韻譜』がどのような書物であったかがわかる<sup>(9)</sup>。

その序文によると、李燾は『説文解字五音韻譜』の初稿を賈端修と共に作り、その配列は『説文解字』の収録字を『類篇』の配列順にならって並べ変えたものであった。しかしその初稿は刊行されないままになっていた。それを虞仲房が配列を変えて作りなおし、刊行したとしている。李燾はこの刊行本と初稿を別のものと考えたかったようである<sup>(10)</sup>。

しかし、われわれが現在見ることのできる『説文解字五音韻譜』の版本はすべて、部首がまず先に平声、上声、去声、入声の順になっており、『類篇』の配列とは異なっているため、結局初稿は刊行されなかったと思われる。従って以下、論を進める際の「李燾の『説文解字五音韻譜』」は初稿ではなく、この刊行本を指すものとする<sup>(11)</sup>。

この李燾の序文を引いた『文献通考』に次ぐ『説文解字五音韻譜』の著録は、紀昀の『四庫全書総目提要・経部小学類存目』（1783）であるが、それは、  
説文解字五音韻譜 十卷、通行本、宋李燾撰、……  
とあり巻数は十巻である。

また、謝啓昆の『小学考』（1798）では、

李氏燾説文解字五音韻譜 三十卷……

とあり、巻数は三十巻である。

今、われわれが見ることのできる『説文解字五音韻譜』の版本はすべて十二巻であるが、その十二巻本については邵懿辰の『増訂四庫簡明目錄標注』(1908繆荃孫序)に、

説文解字五音韻譜十二巻。宋李燾撰。明萬曆戊戌刊本。又天啓七年刊本。入存目。

とあり、続けて邵章の〔續録〕に、

萬曆本。陳大科刊大字。天啓本。世裕堂重刊。明刊大字本。又孫西浦翁刊行大字本。劣。其子見易跋。

とあるので、まずはこれらの記事を手懸りとして現存する版本についての検討を始めることとする。

#### 四、『説文解字五音韻譜』の版本

##### 1. 陳大科本 説文解字五音韻譜 (図版1、2、3)

『増訂四庫簡明目錄標注』にいう「説文解字五音韻譜十二巻。明萬曆戊戌刊本」とは現在最もよく見られる版本で、日本や中国、アメリカ等の主な図書館にも収められており、筆者も所蔵している<sup>(11)</sup>。ただし、第二章の2. で述べたように、題字がすべて「説文解字」となっているため、図書館によっては『説文解字』として登録されていることがある。(図版3 巻一題字)。

また、これは上述の〔續録〕で言うように、陳大科が明の萬曆26年(1598)に刊行したもので、李燾の原本そのままではない。(図版1 陳大科序)。

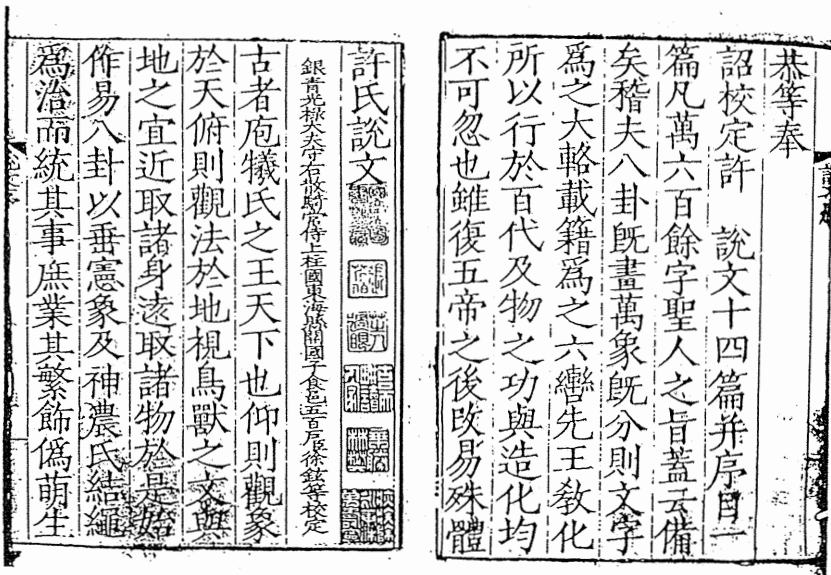
この版本の大きな特徴は、陳大科本がもとづいた、宋の孝宗年間に重刻された旧本が、当時の天子の諱を避けて、「慎」を「御名」としていたのを、もとの「慎」の字に戻したことである。最初に載せられている許慎の序文の中で、陳大科は自らそのことをことわる注を付けている。(図版2 許慎自序)。

またこの本は日本でも広く所蔵されていたとみられ、日本式の装丁になっているものもある<sup>(12)</sup>。

##### 陳大科本 説文解字五音韻譜

形式：半葉7行、毎行14字。四周双辺、黒口、双魚尾。 23.5×17.3cm。

構成：刻説文解字序、説文解字目錄、許慎自序、許冲上書、徐鉉等進表、説文異同、諸家擬意。卷之一 上平声一 … 卷之十二 入声三。



図版 4 許慎序

図版 5 徐鉉表

2. 天啓七年本 說文解字五音韻譜 (図版 4、5)

この本もよく見られる本であり、世界各地の図書館に収蔵されている。

この本は明の天啓7年(1627)に世裕堂から重刊されたもので、刊行年は陳大科本より新しいが、そのもととした原本に手を加えていないので、当時の天子の諱を避けて、「慎」を空格や「御名」とした部分はそのまま残されている。

この本の特徴は陳大科本より小型であることである。また、各巻の題字は「重刊許氏說文解字五音韻譜」となっている。筆者はこの本をイギリスの大英図書館で見たが、そこには2部が所蔵されており、そのどちらにも、「許氏說文」と書かれた封面が付いていた<sup>(13)</sup>。

この本は、世裕堂から重刊された後にさらにそれを使って重刻したさまざまな版本が出ており<sup>(14)</sup>、大英図書館本もその一種である。そのため印刷に不鮮明な部分があったり、版匡や魚尾が不ぞろいであったりする。また、それら後印本の版匡、版心や魚尾にも色々な種類があるようである。ここに図版4、5としてあげるのは、筆者がマイクロフィルムから起こした台湾の國家圖書館所蔵の明刊本で、字体やその形式から見て、天啓七年本と同系統と思われるので、ここにあげて他版本との対比の便を図ることとする<sup>(15)</sup>。

### 明刊本 説文解字五音韻譜

形式：半葉7行、毎行14字。左右双辺、白口、単魚尾。19.2×14.8cm。

構成：許慎説文序、許仲上表、徐鉉等進表、中書省牒文。卷之一 上平声一  
… 卷之十二 入声三。

### 3. 孫西浦刊本 説文解字五音韻譜

これまで、前章であげた『四庫簡明目録標注』に著録された説文解字五音韻譜の2つの代表的版本について考察してきたが、その他に『四庫簡明目録標注』では明刊大字本と孫西浦刊本があげられている。

孫西浦刊本は日本の内閣文庫にあり、嘉靖11年(1533)孫西浦の序とその子孫見易の跋がある。『四庫簡明目録標注』のいうように善本とは言い難いので、ここでは形式と構成のみを記す。

形式：四周双辺。黒口。双魚尾。半葉7行、毎行14字。23.5×17.6

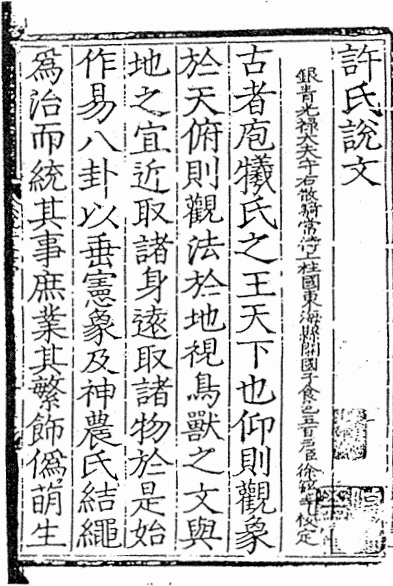
構成：紀刊説文(孫西浦序)、許慎説文序、許仲上表、徐鉉等進表、中書省牒文。卷之一 上平声一 … 卷之十二 入声三。孫見易跋。題字、尾題は許氏説文解字五音韻譜。

これで『四庫簡明目録標注』の中で残るのは明刊大字本である。この説文解字五音韻譜の明刊大字本を最も多く所蔵しているのは台湾の國家圖書館であり、その目録である『國家圖書館善本書誌初稿』(台湾、1998)の中にも5部の明刊大字本が著録されている。また、それに付けられた解説は版本を考える上で非常に参考になるものであるが、筆者が取り寄せたそれらのマイクロフィルムから起こした原本と比較してみると、いくつかの齟齬があることが判明した<sup>(16)</sup>。

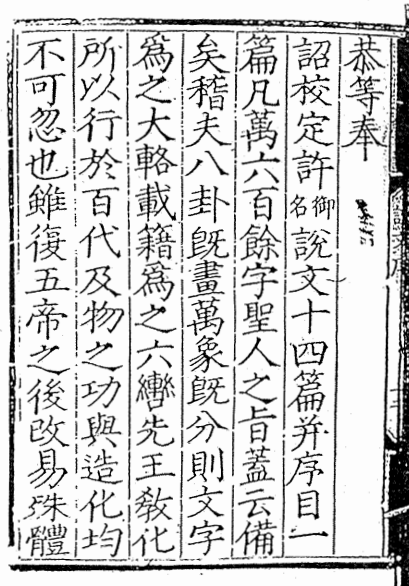
そのため筆者は、もう一度それらの明刊大字本を比較検討した結果、それらが2種類に分類できることが解明できた。以下それを明刊大字甲本、および明刊大字乙本として述べていくこととする。

なお、國家圖書館は明刊大字本以外にも説文解字五音韻譜の多数の善本を収蔵し、最も古いものは、宋淳熙間刊明遜修本とされる本である。ただ、これは完本ではなく、卷十二の一冊が残るのみであるが、説文解字五音韻譜の版本自体のものとの形を考える際には、非常に重要であると言えよう。

しかし、本稿の目的は、日本で翻刻された和刻本説文解字五音韻譜が中国の



図版 6 許慎序



図版 7 徐鉉表

どの版本に基づくのかを解明することであって、中国のどの版本が一番古いのかを追及することではない。従って、中国で刊行された版本をできるだけ網羅的に調べ、その特徴をつかみ、その上で、日本で刊行された版本の特徴と比較対照して、どの中国本の特徴と一致するかを見ていかねばならない。

そのような観点から筆者の分類した明刊大字甲本、および明刊大字乙本を調べていくと、そのうちの一つが日本の刊本の持つ特徴と一致することが判明した。次に、具体例を示し論証していくことにする。

4. 明刊大字甲本 說文解字五音韻譜 (図版 6、7)

『國家圖書館善本書誌初稿』の中に著録されている次の3部がこれあたる。

重刊許氏說文解字五音韻譜十二卷十二冊 明刊本 00929

重刊許氏說文解字五音韻譜十二卷十二冊 明刊大字本 00930

重刊許氏說文解字五音韻譜十二卷八冊 明刊大字本 00931

この本の特徴はいずれも大型であり、当時の天子の諱を避けて、「慎」を「御名」としていた部分はそのまま残されていることである。

明刊大字甲本 說文解字五音韻譜



詔校定許慎說文十四篇并序目  
 一篇凡萬六百餘字聖人之旨蓋云  
 備矣稽夫八卦既畫萬象既分則  
 文字爲之大輅載籍爲之六轡先  
 王教化所以行於百代及物之功與  
 造化均不可忽也雖復五帝之後改  
 易殊體六國之世文字異形然猶存

圖版9 徐鉉表

許氏說文  
 學者擬秦篆時居積夏商周禮本蓋夏徐鉉校定  
 古者危犧氏之王天下也仰則觀  
 象於天俯則觀法於地視鳥獸之  
 文與地之宜近取諸身遠取諸物於  
 是始作易八卦以垂憲象及  
 中夏  
 既結繩爲治而統其事

圖版8 許慎序

新編許氏說文解字五音韻譜卷七  
 文四 重二  
 近求也久承至  
 徽幸也余歲切  
 以臣久壬壬朝  
 廷也無放切  
 古文  
 壁省  
 月滿與日相璧  
 以朔者也久月

圖版11 卷七尾題

重刊許氏說文解字五音韻譜卷七  
 上聲三  

可	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
我切可	九十九肯	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
九十一五	可切我	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎

圖版10 卷七題字



形式：半葉7行、毎行14字。四周双辺、黒口、双魚尾。 24×17.3cm。

構成：許慎序、許仲上表、徐鉉等進表、中書省牒文。卷之一 上平声一 … 卷之十二 入声三。

5. 明刊大字乙本 説文解字五音韻譜 (図版 8、9、10、11)

『國家圖書館善本書誌初稿』の中に著録されている次の2部がこれあたる。

重刊許氏説文解字五音韻譜十二卷十二冊 明刊大字本 00932

重刊許氏説文解字五音韻譜十二卷六冊 明刊大字本 00933

この本の特徴は、甲本に比べると版匡の縦幅が約1cm狭く、横幅が約1cm広いこと。当時の天子の諱を避けず、そのまま「許慎」としていること。また、毎行が13字であることである。特に最後の毎行の字数については、いままで検討してきたすべての版本が毎行14字であったのに対し、13字である点が大きな特徴である。また、第七巻の末葉の尾題が、他の巻はすべて「重刊許氏説文解字五音韻譜」であるのに対し、第七巻だけが、「新編許氏説文解字五音韻譜」となっている点(図版11参照)で他の版本とも異なっている。

明刊大字乙本 説文解字五音韻譜

形式：半葉7行、毎行13字。四周双辺、黒口、双魚尾。 23.3×18.8cm。

構成：許慎序、許仲上表、徐鉉等進表、中書省牒文。卷之一 上平声一 … 卷之十二 入声三。

五、和刻本『説文解字五音韻譜』(図版12、13、14、15)

前章では、現在われわれが見ることのできる説文解字五音韻譜の4種の版本をあげ、それぞれの特徴と相違点を図版をあげて明らかにしてきた。

このうち明刊大字乙本の特徴の、当時の天子の諱を避けず、そのまま「許慎」としていること、毎行が13字であること、第七巻の尾題が、「重刊」ではなく「新編許氏説文解字五音韻譜」となっていることの3点が和刻本説文解字五音韻譜の持つ特徴と一致する。このことから、和刻本説文解字五音韻譜は明刊大字乙本に依拠して刊刻されたと結論する。(p. 19とp. 20の図版を対比して参照されたい)。

## 六、おわりに

和刻本説文解字五音韻譜は寛文10年（1670）に刊行され、『説文韻譜』として広く読まれてきた<sup>(17)</sup>。

たとえば狩谷棧齋（1775～1835）は『説文検字篇』を書くにあたり、『説文韻譜』を『説文真本』や『説文段注』とともに使用している<sup>(18)</sup>。また松崎儼堂（1771～1844）の『日曆』では、文政10年（1827）のところに「○説文韻譜坊刻重彫韓本韻譜、宋の李燾輯集す。文献通考に燾の序全文を載す」という記述がある<sup>(19)</sup>。

このように日本の儒学者たちに広く受け入れられてきた和刻本説文解字五音韻譜も、一体それが中国のどの版本に基づき翻刻されたものであったかについては、従来明らかではなかった。本稿では、以上の検討により、和刻本説文解字五音韻譜がその翻刻に際し、依拠した中国の版本をつきとめることができた。しかしながら、その明刊大字乙本がどこで、誰によって刊刻された版本であるのかについては、まだ不明である。これについては次の研究課題としたい。

## 注

- (1) お茶の水女子大学中国文学会報第17号（1998.4）
- (2) その流れは今でも続いている。例えば『國家圖書館善本書誌初稿』（台湾、1998）でも『重刊許氏説文解字五音韻譜』はすべて「漢許氏撰、宋李燾重編」となっている。
- (3) その他『説文』の検索の便を図ったものには徐鍇の『説文解字韻譜』がある。李燾はこの本の配列を改良する意図をもって『説文解字五音韻譜』を作った（李燾自序）。
- (4) 紀昀は「後人は徐鉉（校訂本の著者）の記述を許慎（原本の著者）の記述として引くことがよくあるが、実はそれは李燾のそこから取り入れたたものでなのである」と述べている（『四庫全書総目提要』）。
- (5) 日本の江戸時代の多くの書籍目録に『許氏説文』と著録されているものが、それである。詳しくは注(1)にあげた拙論の注(8)を参照。
- (6) 卷189、経籍16。
- (7) 注(3)にあげた『説文解字韻譜』と同じ徐鍇の撰。徐鍇は校訂本を作った徐鉉の弟で、徐鉉は校訂本（大徐本と呼ばれる）を作る際にこの本から多くを取った。弟のこの本は小徐本と呼ばれ、『説文解字』の重要な版本の一つであり、徐鍇は兄の要請によりこの『説文解字』の検索の便のために『説文解字韻譜』を作った（李燾自序）。

- (8) 紀昀は「これは明人の『文献通考』がこの序文の前に『説文解字五音韻譜』という書目を立てることをたまたま逸した」と述べている（『四庫全書総目提要』）。
- (9) 序文には「序」と「後序」の二つが載せられている。
- (10) 李燾は「庶学者易曉二書要須各行乃曲當」と表現している。
- (11) この本には「北宋本校刊、説文真本、汲古閣藏板」と刷られた封面がついており、これは日本の近藤正齋が見た本と同系統の本と思われる。詳しくは注(1)にあげた拙論の注(13)を参照。またこの本は白狼書社で刻されたものを、一部、岱雲楼が補ったものである。
- 同じ陳大科本で、赤紙で「北宋本校刊、説文真本、汲古閣藏板」と刷られた封面がついた本が東京大学東洋文化研究所図書館に2部所蔵されている。
- (12) 筆者も日本装丁本を一部持っている。また、アメリカのハーバード大学も日本装丁本を所蔵。『美國哈佛大學哈佛燕京圖書館中本善本書志』（上海辭書出版社、1992、2）p. 73による。原本は未見。
- (13) その封面は2部の版本でそれぞれ違っており、1部は黄紙で、「汲古閣訂閲」と刻されており、もう1部の方は白紙で、「重鐫解字五音韻譜」、「古吳 麟瑞堂藏版」と刻されていた。
- (14) 注(12)にあげた『美國哈佛大學哈佛燕京圖書館中本善本書志』には、世裕堂刻梅谷墅竹韻居修補印本、世裕堂刻雲林五雲堂修補印本が著録されている。また、この目録ではこの他に、明刻本重刊説文解字五音韻譜として車玉刻本、郭兩山刻本、張經世等刻本などがあげられている。
- (15) 天啓七年本は日本では京都大学人文科学研究所図書館、内閣文庫にある。この明刊本と天啓七年本が共通しているのは序12葉裏2行目5字目の慎が御名ではなく空格となっていること。また相違点は巻5、25葉表 溜字の説解、「水在」の後の鬱が明刊本では黒抜きである事である。
- (16) 例えば、明刊大字本（00933）について「序は毎行14字で前の本に比べ1字多い」としているが、実はこの本も毎行13字で前の本（00932）と同じである。
- (17) 筆者収蔵本および大阪府立中之島図書館収蔵本には各表紙に「説文韻譜」「許氏說一……十二」という題箋が付いている。
- (18) 日本古典全集 狩谷掖齋全集 第八（1928）。
- (19) 『棟堂日曆』2（東洋文庫213、1973）。また、『内閣文庫圖書第二部漢籍目録』（1914）p. 451には「許氏説文解字五音韻譜 十二卷 朝鮮版」の著録がある。

（上智大学）